ひきこもりの心情

唯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ひきこもりの心情

【Ｎコード】
Ｎ７１７０Ｓ

【作者名】
唯

【あらすじ】
ひきこもり本人と、その周りの人間達の心の葛藤を描いた物語です。　言葉足らずとは？　相手を気遣うとは？　正論と言葉の暴力とは何か？

1，心の叫び（前書き）

この小説は、作者の実験により、情況描写を『少しぼかして描いています』　読んだ文字を、『想像しながら』、お読みになられますとお楽しみ頂けます。　例、目の前に高いビルがある↑これが次の様になります。↓このビル、頂上付近を見ようと思ったら首が少し痛くなるな。

1，心の叫び

「怖い」

「このままじゃ、いけないのは自分が一番分かっている。だけど、怖いんだよ」

「どうやったら、抜け出せるんだ？　やっぱり、病院しかないのか？」

一年中、部屋に篭りぱっなしの生活はもう嫌だ。あれから二年……　人と接するのが本当にダメになった。

貯金がある頃はまだ良かった。飯は出前で、普通のリズムがある生活をしてたし、何より、症状はここまで酷く無かったハズだ。

それが今では、親に迷惑をかけっぱなしの、親不孝者になっちまった。

友達は少なくなり……　いや！　今はいないと思ったほうが良いかもな。電話をかければ確認出来るが、今の俺には、そんな勇気はないし。

身内は、母さんを除いて『働け』の一点張り。

向こうの言い分は確かに正しいよ。そんな事は、言われなくても自分が一番理解している。だけど、外に出るのが怖い人間にそんな事が出来る訳ないだろ。

俺が何か言えば、「お前が育て方を間違ったんだ！」とか「お前が甘やかすから悪い！」って、母さんが責められる。

違うんだよ、親父。母さんは何も悪くない。むしろ、凄く頑張ってくれてるんだよ。

表には出さないけど、母さんには感謝してる。

いつかは、楽にさせてやりたいって、本当に思う。

だけど、俺……　どうしたら良いんだ？

んっ？　誰かが上がってくる。この時間なら母さんか？

「健？　起きてるの？　入るわよ？」

やっぱり母さんか。
「おはよう母さん」
「おはよう。健？　今日は何時から起きてるの？」
今日の母さんは、少し疲れてるのかな？　いつもの小奇麗なエプロン姿をしてるけど、化粧では隠し切れてない疲れが見える。
「今日は四時に起きたよ」
「四時？　またずいぶんと早起きね？　何かあったの？」
「何もないよ。生活のリズムがぐちゃぐちゃなだけ」
「リズムだけはしっかりとしないとダメよ？」
「分かってる。心配してくれてありがとう。これから、親父を起こすの？」
「そうよ。ねえ、話があるから、お父さんが仕事に行った後、下に下りてきてくれる？」
話？　とうとう母さんも、俺に我慢しきれなくなったか？　どうする？
「怯えなくても大丈夫よ？　お母さんはいつでもあなたの味方だからね」
また母さんに気を遣わせてしまった。ゴメンよ。
「分かった。父さんが行って、少ししたら下りる」
「ありがとう。健？　あなた、ご飯はちゃんと食べたの？」
「母さん達が寝てる間にバナナを一本」
「それじゃあ、お腹空いてるでしょ？」
母さん。
「大丈夫だよ」
「お父さんが行った後、何か作ってあげるわ。じゃあ、後でね」
ロクでもない自分が、嫌になる。
「いつもありがとな。母さん」
やっぱり、病院に行くべきなのかな。だけど……　薬付けや、人間失格のレッテルを貼られそうなイメージがあるから、凄く怖い。
冷静に考えれば、今のこの状態も十分に怖いんだけどな。

それでも、先生に直接言われるよりかは、安心するというかなんと言うか。そんな事を考えているから『ダメ人間』呼ばわりされるのかな。

『他の皆』も、俺と似た様な事を考えてたりするのかな。

んっ？下が騒がしくなってきたな。親父の奴、起きたか？

「何か言ってるな」

「なあ、健……　奴、どうし……　る？」

聞き取りずらいな。やっぱり、ドアを少し空けに行こう」

「今日も元気にしてましたよ」

「……あのバカ、若いのにぐうたらしやがって！」

「あの子も苦しんでいるんですよ」

「苦しいとかじゃなく、男なら、働くのが当たり前だろうに」

「誰だって休む期間くらい……」

親父の奴、朝っぱらからいつもの台詞か……　聞かなくても分かるからもういいや。

俺が会社をやめてから、親父の奴、ずっと同じ事を言っていたな。

「お前も男だろ？　男なら働くのが当たり前だ！　周りを見てみろ！」

じゃあ女なら良いのか？　って考えてみたが、根本的に話が違う。親父の奴、何の為に働いてるんだろ？　家族の為？　じゃあ、もし、家族がいなければ？　自分のため？

働くって、一日の大半の時間を使う物なのに、嫌な仕事が一生続く訳がない。

勿論、生きていくのにお金は必要だ。それは分かっている。だけど、生きていく為に仕事でストレスを抱えて、体を壊した俺は考えてしまう。

毎日、安い給料で長時間の激務をこなし、上司や客と言った、周りとの人間関係で胃が痛くなり、それが悪化して一日中吐き気と闘う日々。

俺はここでギブアップしたけど、この生活が続いたら、胃ガンと

かになるんだろうか？
働くって、このストレスと一生闘い続ける事なのか？　だとしたら皆凄いな。
今の俺には、とてもじゃないが無理だ。
この二年間、働く意味をずっと探してきたけど、未だに答えは見つからない。
分かっているのは、漠然とした答えである、『働かないと生きていけない』って事だけだ。
それだけ分かっていれば十分なのか？　親父や周りに『働く意味』を聞いても、いつも同じ答えが返ってくるだけ。
生きていく為に必要なのは仕事。そこからくる、ストレスに耐えられない人間は、やはり、ダメ人間なのか？
勉強や、仕事が出来ないって言われるのはまだ良いが、人格を否定されるのはつらい。しかも、ほとんどが、上から目線で言ってくる。
自分の精神が不安定な時には、言って来る奴に対して、『こいつ、単に優越感に浸りたいだけ？』と、思う時もあった。振り返れば酷い話だ。元々は、自分の事を心配して言ってくれてるのにな。
今の俺は、他人からみたらどう見えるんだろう？　甘ちゃん？　それともおかしい奴？　考えれば考えるほど気が滅入ってくる。今日はもうやめよ。
そう言えば、下が静かになったな。親父の奴、出かけたんだろうか？
「確認してみるか」
深夜ならともかく、昼間は部屋から出るのが嫌になる。酷いときは、このドアノブを触るのも、ためらうくらいに。
「静かだな。降りてみよう」
階段を降りるのも緊張する時がたまにある。トイレに行くのも憂鬱になるから困ったもんだ。
玄関は……　誰もいない。やはり仕事に行ったみたいだな。リビ

ングに行こう……
この扉の前には母さんしかいないはず、大丈夫だ。
「母さん？」
心配するだけ無駄だったな。
「あら？　降りてきたの？　思ってたより早いわね。ゴメンね。ご飯、まだ作ってないのよ」
「ご飯は気にしないで。それよりも……」
「やっぱり、聞こえてた？　お父さん、言い出したら止まらない人だから。ゴメンね」
そんな顔をしながら言わないでくれよ。見てるこっちが辛くなる。ありがとう。母さん。
「母さんが気にすることじゃないから大丈夫。悪いね」
「良いのよ。あの人は、心の痛みに鈍感な人だから」
鈍感か。親父の言う事は正論に違いないが、母さんの言う事も一理あるな。
「今からご飯作るから、少し待ってなさい」
「いや、良いよ。それより、母さんの話って何かな？」
正直、少し怖いな。一体何の話だろ？
「健？　あなた、最後に外出したのはいつ？」
「いつだったか……　覚えてないよ」
嘘をついてごめん。
「良かったら、お母さんと外に行かない？」
えっ！今、何て言った？
「大丈夫。あなたが拒んでいる病院には行かないわ。ただ、ほんの少しの間、散歩するだけよ」
「俺が……母さんと？」
「そう。ずっと家にいても体に悪いし、どう？」
「いや、俺は良いよ。夜ならまだしも、日中は出たくない」
「夜なら大丈夫なの？」
しまった！　どうする？

「多分……　大丈夫……　かな？」
「分かった。それじゃあ、今日の夜に出かけましょう」
今日の母さんは変だ！　何かあったのか？
「母さん？　一体、何を考えてるの？」
「社会復帰するにしても、外に出れないとダメでしょ？　それなら、先ずは外に出ることから始めないとね」
なるほど。母さんのアイデアか。だけど……
「怖がらなくても大丈夫よ。あなたは以前、毎日外に出てたんだから」
いつも思うけど、母さんは、俺の考えてる事がなんで分かるんだ？　俺ってそんなに単純なのか？　「そうねー。今日は近くの公園に行きましょ。公園ならあなたも大丈夫でしょ？」
「分かった。親父にはなんて言うの？」
「あの人にあなたを任せてたら、どうなるのか分からないからね、お母さんから言っておくわ」
「ＯＫ。なんとか頑張ってみるよ」
「余り深く考えちゃダメよ？　公園というより、トイレに行く感覚でいなさい」
トイレか。中々、難しい問題だ。一度戻ってゆっくりと考えよう。
「分かった。なら、それまでは部屋にいるよ。じゃあ、後で」
「後でご飯を持っていくから、ちゃんと食べるのよー？」
やたらと自分の足音がうるさく聞こえる。しかも、心臓の音まで聞こえるのは何でだ。落ち着かない、早く部屋に……　見えてきた。
アレ？　ドアを開けたら風が少し吹いてきた。おかしいな。窓は勿論、カーテンまで閉めてあるのに。まあいい。ようやく自分のスペースに帰ってこれた。　先ずは落ち着こう。
「どうする？　難題だ」
最後に外に出てから、一年以上経つな。　外がどうなっているかも分からないし。俺に分かるのは、世間のニュース位だ。近所の事なんかまるで分からない。やっぱり、やめるか？　だけど、行かな

かったら何も変わらないよな？
「たった少しで良いんだ、勇気を出せ。前に出来ていたって、母さんも言ってたろ？」
この一歩が、中々踏み出せない。踏み出したら何かが変わる気がしてるのに……
なんでこうなっちまったんだ。我ながら泣けてくる。情けない。
「……アレ？なんで俺、泣いてんだ？」
おかしい。どんどん出てくる。止まらない。マズイ……　ベッドへ行かなきゃ……
こんな姿……　誰にも見せたくない。

1，心の叫び（後書き）

実験段階なので、少し分かりにくいところがあるかも知れません。
各話の続きは、最新話の投稿から、一週間～二週間ペースでＵＰしていく予定です。（作者の都合上、遅れる事もあるかもしれませんがその時はお許しください）　誤字脱字、ご意見、ご感想等がありましたら、よろしくお願いします。

2，すれ違う心

さて、午前中の仕事も一段落したし、飯でも食いに行くか。
「課長――」
ん？　あのスーツとネクタイの色は……　森安か。
「どうした？」
「課長。課長のお昼ご飯の予定はどうなっています？」
「今日は社食の予定だが？」
「宜しければ、お供しても構いませんか？」
お供か……　たまには悪くないな。
「構わんよ」
「ありがとうございます」
「礼を言うほどの物でもないだろう。それじゃあ行くか？」
「ハイ」
相変わらず元気な奴だ。健もこれくらい覇気があればな。それにしても、最近いつも思うが、オフィスと廊下を隔てるここの扉は、何でこんなに重たいんだろう。エレベータから降り、その足で流れるように扉を開けて出入りしてた昔が懐かしい。
「森安君？」
「ハイ？」
「最近、仕事のほうはどうだ？」
……　エレベーター。思ったより早く到着したな。さて、食堂は何階だったかな……　アレ？
「ようやく慣れてきましたよ。少しずつですが、仕事が楽しくなってきました」
「課長？どうしました？」
「食堂は何階だったかな？」
「課長。二階ですよ。二階」
「おお、そうだったな。すまなかった。二階と」

いかんいかん。久しぶりの社食だからな。社食と言えば……　優子の奴、なんで今日は弁当を作らなかったんだ？　あいつの味で慣れてるから、今日は変な気分だ。
「課長？　大丈夫ですか？　仕事のしすぎなんじゃ？」
「バカな事を言ってはいかん。私はまだまだ現役だよ？」
「課長が現役なのは皆が知ってますよ。……　二階ですね」
「午後も仕事が山ほどあるからな。がっつり食うか」
「ハイ」
　最後にここへ来たのはいつだったか……　新人の頃、良く、先輩と一緒に食べに来たもんだ。それにしても、いつからバイキング式になったんだ？　しばらく利用しない内に、随分と変わったな。
「沢山メニューがあるな……　森安君は何を食うんだ？」
「僕はとんかつ定食にしますよ。課長は？」
「私か？　私は……」
　たまには重たい物でも食べるか。
「良い機会だから君と同じ物にしよう」
「流石ですねー。僕も将来は、課長みたいな人になりたいです」
「ハハハハ。森安君、君には期待してるよ」
　明るく会話でき、お世辞も言える。健もこれくらい出来ればな。
「お疲れ様です。メニューの料金は……」
「すまないが、彼の分も一緒に清算してくれ」
「課長。良いですよ。気を遣わないで下さいな」
「良いんだよ。年上からの好意は、素直に受け取っておくものだ。……　すまないがよろしく頼む」
　月日が経つのは早いな。　俺にご馳走してくれた時、先輩も似たような事を思っていたのだろうか？
「かしこまりました。でしたら、合計……」
「ありがとうございます。今度、何かご馳走させてもらいますね」
「君が社長になったときにでも、美味い物を食わせてくれ」
「社長ですか？　全く先が見えない……」

「ハハハハ。メニューも受け取ったし、席につこうじゃないか」
「は、ハイ」
可愛い奴だ。あいつが何を聞きたいのか知らんが、持ってきた弁当を捨ててまでここにいるからな。これくらいの事はしてやらんとな。
「よっこらせと。それじゃあ食うか」
「ハイ。いただきます」
最後にとんかつを食ったのは、いつだっけなー。
「課長はソースですか？」
「ああ」
「すまんな」
受け取ったのは良いが、なんでウスターソースしか置いてないんだ？　残念だ。
「……　君もソースか？」
「勿論ですよ。からし入りはダメですけどね」
「君もからしはダメなのか？」
健と言い、最近の若い子は辛いものが苦手らしい。
「ハイ。あ、ありがとうございます。……　課長もダメなんですか？」
「いや、私は大丈夫なんだが、息子がな」
「課長のお子さんもダメなんですか？　だとしたら良い話が出来そうですね」
「うちの息子のバカが君に移ると大変だから、やめときなさい」
「バカだなんて、おっ、ここのとんかつ、中々イケる」
「どれ、私もいただくとしよう」
少々油っぽいな。この様子だと、完食は出来るだろうが、後で胃薬が必要になりそうだ。
「君の言う通り、美味いじゃないか」
「ですよね？　これで値段がもう少し安ければ……」
「同感だ」

……　なんだ。森安の奴、笑うともっと好青年になるじゃないか。それにしても……　久々にくつろいでいる気がするな。たまには、誰かと昼飯を食うのも良いな。
「課長って、今みたいな感じで笑うんですね」
「ん？　私の笑う姿を見たことはなかったのか？」
「少なくとも、今みたいな笑い方は、初めて見ましたよ」
「そうか？　飲みに行ったら、ひどいもんだぞ？」
あれ以来、酷かった酒癖はだいぶマシになったが、酔っている俺の姿を見たら、この子も多分、引くだろうな。
「お酒が飲める課長がうらやましいです」
「君は飲めない性質か？」
「ハイ、出来る範囲で努力はしてるんですが、ちょっと加減を間違えたら次の日は……」
「若いうちはそんなもんだ。飲み続けてれば嫌でも強くなる。ただし、限度はあるがね」
言っていて、自分でも呆れるな。いや、成長したと言うべきか？
あの時の苦い経験が、こんなところで役にたつとはな。　今思うと、あいつには、本当に悪いことをしたな。
「気になったんですが、課長のお子さんて、いくつ位なんですか？」
「いきなりどうしたんだ？」
「いえ、課長のお子さんもお酒が強いのかな？　と」
「うちのバカ息子も、君と一緒で強くないよ。むしろ君より弱いかもしれん」
「お酒の強さって遺伝するものではないんですかねー？」
「さあな？　私も妻も、酒は飲む方だがあいつはダメだ。あいつより、娘の方がよっぽど飲める」
「課長のお子さんは二人いらっしゃったんですか？」
「ああ、息子と娘、どちらも成人してる」
もっとも、片方はまだまだ子供だがな。
「成人しても、子供は可愛いものですか？」

「どうだろうな。私には良く分からない。しかしだ。親としては、立派になって貰いたいと、常に思っておるよ」
「親心って奴ですね？」
「そうだ。君も子供を持ったら分かる。私が言うのもなんだが、子供ってのは意外と難しいものだぞ？」
うちみたいなのは特殊なんだろうがな。
「重みのある言葉ですね。頭に叩き込んでおきます」
「女は良く分からんし、男は昔の自分を見ている気がしてなんだかな。遺伝なのかも知れんが、見ていてあまり気分の良いものではないよ」
「家庭を持つって大変ですね」
「それに、妻の小言も加わるしな」
小言と言っても、うちのは少し変わっているが、まあ良いだろう。
「なんだか、当分、独身で良いような気がしてきました」
「若いうちは色々と遊びなさい。結婚なんてその後に考えれば良い」
「そうしときます。課長？　お冷を持ってきましょうか？」
「すまないな。助かるよ」
結局、聞きたいことがなんだったのかは分からんが、じっくりと話すと、良い青年じゃあないか。うちのバカ息子に見習わしたいものだ。
あいつが仕事をやめて二年……　それで……　ケンカしたのは一年ほど前だっけか？　それ以来、妻からは手を出すなと言われたが、あいつは、息子に甘すぎる。
あんな接し方じゃあ、将来あいつが、一家の大黒柱になる事なんて絶対に無理だ。やはり……
「課長。お待たせしました」
「おお。すまないな」
いや、今はまだやめておこう。下手に動いて、またあいつに泣きつかれたら、たまらんしな。
「ご馳走様です。今日はありがとうございました」

「いやいや、こちらこそありがとう。君と話してたら元気が出てきたよ。さあ、後半戦の始まりだ！」
「ハイ。頑張ります」
この子と別れたら、胃薬を飲みに行こう。もたれてしまって敵わん。歳はとりたくないものだ。

2，すれ違う心（後書き）

４／２６日ｕｐ

相手に、自分の思っている言葉をきちんと伝えるって、大切だな～って感じます。現実では、言葉足らずになったりだとか、誤解を招いたりして、中々上手くいきません（笑）

予定より、少し早めのｕｐになりましたが、次回も遅れる事無く、更新しますのでお楽しみに。（ｕｐ　については、第一話の後書きを参照）

3，健の理解者

「今晩のおかずにお肉はいかかですかー。一度お味見して下さーい。」

相変わらず、ここのスーパーは人が多いわね。買い物するのも一苦労。

「夕飯は何にしようかしら？」

健はお昼ご飯も食べずに寝ちゃってたし、お父さんもお弁当を持たせてないから、二人はきっと、飢えてるわね。ステーキも良いけど、お父さんは嫌がるだろうし、困ったわー―。

「ん？　誰かしら？」

「もしもし？」

「優子か？　俺だ」

「あらぁ。かっちゃん。こんにちわ。どうしたの？」

「以前、お前が話してた件なんだが、あれから、どうなったかと思ってな……」

確か……　最初にかっちゃんとこの話をしてから、二ヶ月以上も経つわね。悪い事をしたわ。

「遅くてごめんね。こっちは順調に進んでるわ。問題がなければ、思っていたよりも、早く会いにいけそうよ。その時はよろしくね？」

「他ならぬ、お前の頼みだからな。任せな。」

普通なら、「どれだけ待たせるんだ！」って、怒るところなのに……　ありがとう、かっちゃん。

「こっちの用意が出来たら、改めて連絡するわ。それまで、もうしばらく待ってね」

「分かった。優子……　何かあったら、すぐに連絡しろよ？　本人もそうだが、お前もつらいだろうし……」

かっちゃん……　相変わらず優しいのね。かっちゃんと結婚してたら、どんな家庭になったのかしらね？

「ありがと。迷惑をかけてごめんね」
「気にするな。それじゃあ。またな」
お父さんはダメだけど、かっちゃんが相手なら、あの子もうまくやれるはず。とりあえず、今は目先の事に集中しましょ。先ずは買い物の続きからね。さぁて……　ん？　お魚か……
「お父さんは好きだけど、健は好きじゃないのよね。どうしましょ？」
「あら？　優子さんじゃない？　こんにちわ」
……　会いたくない人に会ったわね。
「こんにちわ。　佐々木さんもお買い物ですか？」
「そうなのよ。うちの家、子供は勿論、『大人』まで食べ盛りだから困っちゃうのよ」
「大変なんですね」
「優子さんのところに比べたら、うちなんかまだまだ」
相変わらず嫌味な女ね！　『食べ盛りの大人』は、健じゃなくて、アンタの旦那でしょうに。　アンタの家の噂は、お隣さんから、聞いてるのよ？
「うちは大丈夫ですから、ご心配なく」
「悩みとかがあったら遠慮なく言って下さいね？　いつでも相談に乗りますから」
「ありがとうございます。買い物があるので失礼しますね。では」
人の悩みなんか、聞いてる場合じゃないと思うけど……　あの女、自分がどんな状態なのか、気づいているのかしら？
……　なんか、イライラしてきた。お父さんには悪いけど、今日は健との約束もあるし、今晩は豪華な物にしちゃいましょ。そうと決まれば、お肉売り場に戻りますか……
「今晩のおかずにお肉はいかがですかぁ」
さて。今日の量は、少し多めにしときますか。
「すいません。サーロインを三枚下さい、グラムは……」
これでよし。あの二人ならこれ位、ペロって食べるでしょ。後は、

付けあわせね。
「……じゃがいもは面倒だし、コーンと人参にしときましょ」
確か、野菜はあったから、後は……
「ん？　今度は誰からかしら？」
「もしもし？」
「お母さん？　アタシだけど」
「良子？　久しぶりねぇ。どうしたの？」
「バカ兄貴に電話しても繋がらなくてさ。それで、どうしてるのかな？って」
酷い呼び方ね。自分のお兄さんでしょうに……
「健は元気にしてるわよ。あなたは元気にしてるの？」
「アタシは元気よ。　それより、バカ兄貴は、今何してるの？」
「相変わらずよ。だけど、少しずつ良くなっているわ」
「未だに変わらずか……　今度、実家に帰ったとき、説教でもしてやろうかしら？」
この子ったら。変わらないわね。
「……　良子？　あの子に必要なのは、説教ではなくて、ゆっくりでも良いから、自分の足でしっかりと歩んでいく事よ？」
「お母さん？　子供ならともかく、あいつは大人でしょ？」
「子供でも大人でも、歩いていたら誰だってつまずく事はあるわ。あなたはつまずいている人を蹴ったりするの？」
「蹴りはしないけど……　つまずいたら、サッサと自分で立ち上がるでしょ？」
「早く立ち上がれない人が、お前は遅いからダメだ！　って、言われたらあなたはどう思う？」
「そんなの、根性でしょ？」
遺伝なのか、誰かさんの背中を見て育ったのかは分からないけど、この子はお父さんそっくりね。
「世の中には、立ち上がるのに時間がかかる人もいるのよ？」
「お母さんは甘いのよ！　だからいつまでたっても、バカ兄貴が変

わらないんじゃない！」
この様子だと、健も大変ね。良子の電話に出ないのも無理ないわ。
「健を追い詰めたら本当に良くなると思う？」
「追い詰めるって！　人聞きの悪い事を言わないでよ。　あいつのせいで、恥をかいたりして迷惑を受けてるのはアタシなんだから！」
迷惑か……
「お母さんやお父さんだってそうでしょ？　悪いのは、全部バカ兄貴でしょ？」
確かに、良子の言うことも、最もなんだけどね……
「ねえ、良子？　本人が、辛い時にムチを打つのが家族なの？　家族って、助け合うものじゃない？」
「あんな奴、家族とは思わない！」
「良子？　あなた……」
「お母さんも考え直した方が良いよ！　じゃあね！」
健の気持ちよりも、自分の気持ちが優先か……　当然の事だけど、少し悲しいわね。昔は優しくて、兄思いの良い子だったのに……
時間を取ったわね。残りの買い物を済ませて、サッサと帰りましょう。
残りの買い物は確か……　コーンね。
いつもは茹でる終わりだけど、今日は醤油バター味にしときますか。缶詰のコーナーは……　あったわ。
……　これでよし。レジに向かいましょう。
「5時30……　早めに来ておいて良かったわ」
レジは……　あそこが空いてるわね。今のうちに……
「いらっしゃいませ。　お肉が三点に……」
今日の夜、あの子はちゃんと外に出れるかしら？　怖気づいてなければ良いけど……　今晩のメニューのステーキは、ご褒美って事で食べさせる？
「……　円になります」
思ったより高い。衝動買いは危険ね。

「おつりの３５８円になります。ありがとうございました」
そろそろ、私もマイバッグを持参しようかしら？　って、ちょっと！　置きにくいから、自分で使ったカゴくらい、ちゃんと片付けていきなさいよ！　最近のマナーはどうなってるの？
……　これでよし。さあ、帰りますか。ステーキだから、健の分は、先に食べさせてあげないとダメね。さっ。帰りましょ。

3，健の理解者（後書き）

何気ない日常を表現してみました。次の更新は一週間以内にする予定です。

4、二人三脚

「母さん」
ここは、俺が一番冷静でいられる場所だろ？　なのに…　何故こんなにも落ち着かないんだ？　考えてみれば、時間が経てば経つほどに、ドンドン酷くなっている気がする。まるで、ジワジワと絞め殺されそうな感覚だ。
「落ち着け……　大丈夫だ……　たかが散歩だ」
情けない。本当に……　えっ！　まだ、9時だぞ？　もう行くのか？　少しづつ近づいてくるあの音が怖い。頼むから止まってくれ！
「健？　入るわよ？」
「待って！」
どうしよう。胸から出ている音がうるさすぎる！　落ち着いて考えられない。
「健？　大丈夫だから……　ドア、開けるからね？」
母さん。俺、どんな風に見えてる？　あっ、閉めてくれてありがとう。助かった。
「やっぱり、思いつめてたわね？」
「だ、大丈夫だよ。母さん」
「鏡で自分の顔を見て御覧なさい。酷い顔してるから」
正直、余り見たくない。
「そんなに酷い？」
「ええ。まるで、死人みたいよ？」
死人か。なんか、おかしくなってきたな。よく考えたら、今の俺の生活、死人と余り変わらないな。
ロクに動かず、食べて寝るだけの毎日なら死人と一緒だ。
「ニヤついてるけど、どうしたの？」
「何でもない。少し楽になった気がする」

「それなら良いけど……　準備は出来た？」
「親父は？」
「お父さんならお風呂よ。出かけるなら今のうちが良いからね」
「母さん。俺……」
「大丈夫。勇気を出して。お母さんと一緒なら怖くないでしょ？」
「頑張ってみる」
「お母さんと一緒に部屋から出る？」
「大丈夫。それは自分でも出来るから。母さんは先に玄関へ行って」
「分かった」
母さん。　後ろ姿が頼もしく見えるよ。ん？　母さんがドアを閉めるときって、あんな風に優しく閉めてくれてたんだな。そんな細かいところまで気をつけてたなんて、今まで気づかなかったよ。ありがとう。
なんだ？　さっきと比べて、凄い静かだ。それに、今なら行けそうな気がする。……　今のうちに、部屋から出たほうが良いかも知れない。
「……　出来た」
良いぞ。その調子で玄関まで行こう。なんだ？　ドアどころか、階段までスムーズに降りられる！　どうなってんだ？　あっ。母さん。
「こっちよ。いらっしゃい」
今行くよ。
「健？　無事に公園に着いたらご褒美をあげるからね」
ご褒美って。それにしても、靴を履くのは久しぶりだな。この感覚は正直、懐かしい。
「行こう、母さん」
「開けるからね？」
いつでも良いよ。……　これだよ。道路の匂い、肌にまとわりつくこの風、それに……　この静けさ。懐かしい。

「健？」
「ああ、ごめん。」
「驚いたわ。こんなにスムーズに出れるなんて。予想外よ？」
「母さんがいてくれるからだよ」
さっきから、自分でも良く分からない。良く耳にする、何かのきっかけってこれの事なのか？
「息子と夜のデートが出来るなんて、お母さんは幸せだわ。さっ。行きましょう」
母さん。恥ずかしいよ。だけど、気遣ってくれてありがとう。
「公園まで、どれくらいだっけ？」
「１０分くらいよ」
変な気分だ。たまに人とすれ違ったりするのに、何も感じない。俺は何に怯えていたんだ？
「母さん？」
「ん？　どうしたの？」
「気持ち良いね」
「そうでしょ？」
こうして、母さんと歩くのは小学校以来だな。こんな状態じゃなければ、今のような経験は出来なかったかもな。
「健？」
なんだい？　母さん。
「外に出てからのあなた、どんどん良い表情になっていってるわ」
「そ、そうかな？　自分では気づかないよ」
一体、俺はどんな表情をしてるんだ？
「いつも見ているお母さんが言うから間違いないわ」
アレ？　この公園は……
「着いたわ」
「母さん？　ここって……」
「懐かしいでしょ？　小さい頃、あなたはここで良く遊んでたわね」
「入りましょう」

「誰もいないね」
「こんな時間に誰かがいたりしたら、お母さんビックリよ？」
ビックリって。母さん。何かを忘れてませんか？
「そ、そうだね」
「お母さん、ブランコが好きだから今日はブランコね」
懐かしいな。母さんが座っている姿を見てると、昔を思い出すよ。
母さんに、良く後ろから押してもらったっけ？
「健も座って」
……　座ってはみたものの、少しキツイなあ。
「健？　外に出た感想はどう？」
「なんで出れたのか、まだ分からないけど……　良いね」
「そうでしょ。　今日は公園だったけど、これがお買い物とかなら最高よ？」
今日の母さん、なんか生き生きとしてるな。
「買い物は人が多いよ」
「何を言ってるの？　皆が狙っている目玉商品が買えた時なんか、凄い幸せよ？　激戦に勝ちましたって奴ね！」
目玉商品。母さん、面白い事を言うね。
「激戦か……　忙しく働いていた時を思い出すね」
アレ？　一瞬、母さんの表情が変わったのは気のせいか？
「健？　お父さんや良子の事は気にしなくて良いからね？」
「母さんは特にそうだけど、皆には悪いと思っているよ。いつも……」
本当だ。こんな人間でごめんよ。
「健……」
「皆の言う事ももっともだしね。だけど……」
「ゆっくりと始めれば良いのよ」
母さん。俺の事、本当に理解してくれてありがとう。アレ？
「健……」
ちくしょう！　昼間に出し切ったハズだろ！　みっともない。

「ごめんよ。……　情けなくて。本当にゴメン……」
「我慢ばっかりしているからよ」
……　母さんの体、暖かい。まずい。余計に涙が。
「良い？　健？　つらい時は正直につらいと言って、泣きたい時は思いっきり泣きなさい。我慢するからだんだんとおかしくなるの」
「……　だけど……」
「周りなんか気にしないで。歳も性別も関係ない。自分の弱い姿を見せるのは恥ずかしい事じゃないわ。優しくて、心が暖かい証拠よ。もっと自信を持ちなさい」
「ゆっくりでも、あなたはあなたのペースで進めば良いのよ。遅くても大丈夫。ペースなんて、慣れたらどうにでもなるから。良い？」
違うものがとめどなく出てくる。俺が出したいのは言葉なのに……
「可愛そうに……　相当苦しんでいたのね。出し切りなさい。ずっとそばにいるから……」
ごめんよ。母さん。ありがとう……
「……　母さん。母さん」
忘れたハズなのに、何故？　「えっ！　お前今、無職なの？　男で無職はヤバイだろ？　だっせぇなあ」「このバカ息子が！　男がこれくらいの酒を飲めんでどうする！　気合入れて飲まんか！」「社会でも家でも、迷惑なんだよ！　クソ兄貴！」……　完全に消したハズ。いらないよ。お願いだから消えてよ！　思い出したくないんだ！　……　アレ？　撫でられるって、こんなにも落ち着くんだな。初めて知った。それに……　凄く安らげる。ありがとう。母さん。
「……　落ち着いた？」
うん。
「健？　お父さんや良子は、お母さんがなんとかするから、自分の事だけを考えなさい。良い？」
「うん」
「何かあったらすぐに相談しなさい。お母さんはいつでも話を聞く

から」
「ごめんね」
「誤る事なんてしなくて良いの。大切なのは、あなたが無理をしない事なんだから」
母さん。俺、母さんの子供で、本当に良かった。ありがとう。
「俺、歩みだしてみる」
「健……　ゆっくりでいいからね。絶対に、あせっちゃダメよ？　慎重にね」
「うん。分かってる」
「次はどうする？」
どうしようか？　アレ？　お腹が空いてきた？
「分からない。だけど、ご飯を食べに行きたいな」
「何が食べたいの？」
「昔、良く食べに行ってたグラタン」
「あのグラタンね。あなた、好きだったものね。分かった」
ん？　何が分かったの？
「今日のご褒美はグラタンにしましょう」
母さん。
「ご褒美、あったんだ？」
「当然よ。頑張ったらしっかりと褒めてあげないとね」
「ありがと」
「だけど……　今日は遅いから、次の機会ね」
「母さん、俺、お腹空いちゃった」
「泣いた後はお腹が空くものよ？　それじゃあそろそろ帰りましょう。帰ったらなんか作ってあげる」　言われて見れば、確かにそうだな。泣き虫だった頃、良くお腹を空かせていたっけ？
「ありがとう」

4、二人三脚（後書き）

優しい母。マザコンと親思いの違いとは？

今後は、そこを表現していけたら良いなと思います。勿論、脱線はしませんのでご安心下さい。

次回は二週間以内にＵＰ　します。

お読みになった皆様に感謝です。

ありがとうございます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7170s/

ひきこもりの心情

2011年5月7日05時40分発行